

論文

日本と韓国の児童が捉える家庭科と実科の授業

Children thought of Home Economics Classes and Practical Art Classes
in Japan and South Korea

小島 郷子 (高知大学教育学部)

KOJIMA Kyoko

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate what children thought of home economics classes and practical art classes in Japan and South Korea based on the results of class evaluation questionnaires.

The factors extracted from a questionnaire on home economics classes are “skills,” “problem solving,” “how to learn” and “confidence and motivation”. The factors extracted from a questionnaire on practical art classes are “motivation,” “value,” “involvement,” “self-esteem,” “how to learn,” “problem solving” and “skills.”

As for Japanese children, the score of all factors are lower among children in the 6th grade compared to among those in the other grades. As for South Korean children, the scores of some factors are higher among the 6th grade children. In terms of gender, all the scores are higher among girls than boys both in Japan and South Korea.

This study also examined whether or not children liked teachers and lessons as a factor which influenced their evaluation of classes. However, there was not a great difference in it between Japanese and South Korean children.

1. 問題の所在

近年日本と韓国の文化交流は盛んになり、日本においては「韓流ブーム」と言われる社会現象が起きて久しく、韓国においても日本人作家の小説がベストセラーになるなど、両国間で映画やドラマ、音楽、小説などは相互に認められるようになってきた。「韓流ブーム」の源流は、金大中政権下の1998年からの映画や音楽などの日本大衆文化の段階的な解放政策にさかのぼり、その後、1988年ソウルオリンピック、2003年ワールドカップ共同開催といった国際的スポーツイベントはその距離を近づけ、2004年に地上波放送された「冬のソナタ」のヒットへとつながっていく。盧武鉉政権は2005年を「日韓友情の年」と宣言し、両国の文化交流を深めることを目的としたイベントが多数開催され、両国間を行き来する観光客の数も増加した。

今や日本における「韓流」はブームを過ぎて、日本文化の中に浸透しているといえる。しかし、盧武鉉政権下に竹島領有権問題や日本の教科書歴史問題が起り、両国の友好ムードが上昇しているとは言い難く、両国にまたがる歴史認識や領土問題が容易に解決できるとは思えない。市民レベルや学校間レベルといった草の根的な民間レベルの多様な交流に依るしか、その壁が低くなっていくことはないと思われる。日韓の交流は文化面だけでなく、教育・研究の分野においても盛んになってきている。

学校教育に関して日本と韓国を比較してみると、ナショナルカリキュラムが導入されていることや、教育課程がほぼ10年で改訂されていること、6・3・3・4制の単線型の教育制度を持ち、義務教育が9年間で男女共学であるなど、教育制度や教育課程は類似している点は多く認められる。一方、教科ごとにみれば学習内容や学習方法また評価方法については異なる点も多くみられる。日韓の比較研究等が盛んな教科もあるが、家庭科や技術・家庭科では両国の教育課程が改訂された1990年前後に中学校を対象とした研究が報告されているが^{1) 2)}、その後、大学生の家族生活意識と家庭科の学習内容との関係を明らかにしようとした研究³⁾や韓国初等実科の教科特性に関する研究⁴⁾は見られるが、両国の家庭科と実科を比較した研究は報告されていない。

筆者は、この間日本と韓国の実技を伴う教科に関するカリキュラム研究や授業評価研究を行い多

くの知見を得た^{5) ~11)}。この間の報告では実技を伴う4教科(音楽・美術・家庭・体育)の比較が主な内容であり、家庭科と実科を取り上げた報告はしていない。

そこで、本稿では日本の家庭科と韓国の実科の比較研究を通して日本と韓国の小学生が家庭科や実科をどのような教科と捉えているのかについて明らかにする。

2. 日本の家庭科と韓国の実科の学習目標と学習内容

教育課程は、日本では文部科学省、韓国では教育科学技術部と教育課程評価院が編成している。第二次世界大戦後に両国は新しい国家建設のための教育課程が策定された。最初の教育課程は、日本では1947年の学習指導要領であり、韓国では1946年の国民学校教授要目である。両国とも、その後約10年前後を基準に改訂が行われ、現行の教育課程は日本では2008年に、韓国では2009年に改訂が行われた。

ここでは、現行の教育課程をもとに、家庭科と実家についてその概要を述べる。

家庭科と実科は小学校第5学年から始まる科目であり、履修開始学年は両教科で共通している。年間授業時間数は、家庭科は小学校5学年60時間、6学年55時間であるが、韓国では2009年改訂教育課程において、授業時間配当が各学年ではなく2学年単位とした学年群や、教育目的上の近接性や教育方法上の隣接性を考慮した教科群を導入するようになり、実科も科学/実科の標記となり、

表1 日本の教科配当時間(2008年改訂)

教科等	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	
各教科の 時数	国語	306	315	245	245	175	175
	社会	-	-	70	90	100	105
	算数	136	175	175	175	175	175
	理科	-	-	90	105	105	105
	生活	102	105	-	-	-	-
	音楽	68	70	60	60	50	50
	図画工作	68	70	60	60	50	50
	家庭	-	-	-	-	60	55
	体育	102	105	105	105	90	90
道徳	34	35	35	35	35	35	
外国語活動	-	-	-	-	35	35	
総合的な学習の時間	-	-	70	70	70	70	
特別活動	34	35	35	35	35	35	
総授業時数	850	910	945	980	980	980	

※1時間授業 45分

授業時間数も科学/実科で5-6学年340時間と標記されたため、実際の実科としての年間授業時間数が何時間保障されているか不明である。このことは、学校の裁量で教科時間配当や時数を決定できるようにするための措置である。

表2 韓国の教育課程時間基準(2009年教育課程)

区分	1-2学年	3-4学年	5-6学年	
教科(群)	国語	448	408	408
	社会/道徳	-	272	272
	正しい生活	128	-	-
	数学	256	272	272
	賢い生活	192	-	-
	科学/実科	128	204	340
	楽しい生活	384	-	-
	体育	-	204	204
	芸術(音楽/美術)	-	272	272
	英語	-	136	204
創意的体験活動	272	204	204	
学年群別授業時間数	1680	1972	2176	

正しい生活・・・道徳、賢い生活・・・社会、科学の統合教科

楽しい生活・・・体育、音楽、美術の統合教科

実科・・・日本の家庭科に該当。5学年から実施。

※ 1授業時間40分

※ 教科群は2年間での目安時間で、20%の増減が可能。

※ 創意的体験活動・・・これまでの裁量時間、特別活動を統合したもの。

※ 学年群別総授業時間数は、最小授業時間数を現わしたもの。

次に、両教科の教育目標について述べる(表3)。家庭科の教科目標は、「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」である。自立して家庭生活を営むことができる実践的な能力をつける教科であり、自分の暮らし全体について総合的に捉え、考えるための教科である。

実科は、実践的経験を通じて実生活に必要な生活資質を育てる実践教科として位置付けられており、家庭生活と技術の世界に関連した知識体系で構成されている。教育目標は、「“家庭生活”と“技術の世界”に関する知識、能力、価値判断力を育成し、現在と未来生活を主導できる力量と態度を育てる」である。“家庭生活”分野では、「家庭生活に必要な基礎生活能力を育成し、人生を主導していくことができる力量と態度を育てる」ことが目標とされ、特に衣食住及び生活資源の管理能力と家族、資源、環境との望ましい関係を確立し、

表3 家庭科と実科の教科目標

家庭科
衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。
(1)衣食住や家族の生活などに関する実践的・体験的な活動を通して、自分の成長を自覚するとともに、家庭生活への関心を高め、その大切さに気付くようにする。 (2)日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、身近な生活に活用できるようにする。 (3)自分と家族などのかかわりを考えて実践する喜びを味わい、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。
実科
家庭生活'と'技術の世界'に対する知識、技能、価値判断を育成して元気な個人及び家庭生活を営むこと、技術に対する基本資質を習得して、現在と未来生活を主導できる力量と態度を育てる。
(1)私と家族を理解して家庭生活に必要な基礎生活能力を育成して、家庭生活上で直面する問題を解決して元気な個人及び家族構成員として自身の人生を主導していくことができる力量と態度を育てる。 (2)生活の中で技術と関連する問題を探索し、創意的に解決することによって日常生活で技術を活用できる能力を育てながら、また将来の職業と世界に対する健全な価値観を形成し、進路を見つけ、将来の社会に適応する力量と態度を育てる。

日常生活の中で問題を解決することが重視されている。

家庭科の教育内容は「家庭生活と家族」「日常の食事と調理の基礎」「快適な衣服と住まい」「身近な消費生活と環境」の4領域である(表4)。

実科の学習内容は「家庭生活」と「技術の世界」の2分野から構成されている(表5)。実科の「技術の世界」は、日本の中学校技術・家庭科の技術分野に関わった内容であるが、韓国では同内容を小学校段階から学習しているといえる。家庭生活に関わる部分では、家族・家庭生活、食生活、衣生活、住生活、消費生活や生活資源管理など両科目とも同様の内容構成になっている。

表4 2008年改訂教育課程における家庭科の学習内容

家庭科(5・6学年)	A 家庭生活と家族
	・自分の成長と家族
	・家庭生活と仕事
	・家族や近隣の人々とのかかわり
B 日常の食事と調理	
・食事の役割	
・栄養を考えた食事	
・調理の基礎	
C 快適な衣服と住まい	
・衣服の着用と手入れ	
・快適な住まい方	
・生活に役立つ物の製作	
D 身近な消費生活と環境	
・物や金銭の使い方と買物	
・環境に配慮した生活の工夫	

表5 2009年改訂教育課程における実科の学習内容

	家庭生活	技術の世界
実科 (5・6学年)	(1)私の家庭生活 ・私の成長と家族 ・家庭の仕事と家族の役割	(1)生活と技術 ・技術と発明の基礎 ・創意的な製品の製作
	(2)私のバランスのとれた食生活 ・私の栄養と食事 ・健康なおやつづくり	(2)生活の中の動植物 ・人間の生活と動植物 ・動植物の資源と環境
	(3)私の自立的な衣生活 ・健康で安全な身なり(服装) ・自分の衣服の管理	(3)生活と情報 ・情報機器のサイバー環境 ・マルチメディア資料の作成
	(4)快適な住居と生活資源管理 ・住居空間と生活資源管理 ・おこづかいと時間管理	(4)生活と電気・電子 ・電気・電子の利用 ・ロボットの理解
	(5)健康な食生活の実践 ・健康で安全な食事 ・食べ物づくりと食事礼儀	(5)生活の中の動植物の利用 ・生活の中で植物の栽培 ・生活の中で動物の世話
	(6)創造的な衣生活の実践 ・生活にある布製品の制作 ・環境と配分の生活用品づくり	(6)私の進路 ・職業の世界 ・進路設計

実科の「技術の世界」は、生活の中の技術や電気・電子の利用やロボットの理解、生活と情報、生活の中の動植物の利用と進路に関する学習内容で構成されている。生活と電気・電子では、日常生活の中で、色々な形態で使っている電気・電子の原理を理解して簡単な製品を作ることや、生活で使われているロボットの原理を理解した上で、簡単なロボット体験をしている。生活の中の動植物では、生活の中で花や野菜などの育て方を理解して実際に花や野菜の栽培をすることになっている。

また、人間と動物の関係を理解して、育てる目的に合った動物の種類や特性について知り、動物を飼うのに必要な知識と態度を修得させるとともに、ペットや経済動物(牛や豚、鶏などの利益をもたらす家畜などの動物のこと)を生活に利用することができるという学習内容が設定されている。

生活と情報では情報機器の種類、特性、機能を理解して、生活の中での多様な方法で活用することや、サイバー空間の特性を理解してサイバー空間での正しい論理意識を実践する内容、インターネットを通して効率的に情報を検索し、有用な情報を選択したり、家族や友達との余暇活動や趣味などにインターネットを活用したりする方法を学習している。私の進路では仕事と職業の意味と重要性を探索して、家庭の仕事と職業の相互補完的な関係を認識させるとともに、自分の興味や適性などを把握して、将来自分に適した職業を探すと

ともに、仕事に対する肯定的な態度を持つ内容が設定されている。

小学校の段階から、生活技術や情報、動植物への理解や進路設計が含まれている点が特徴的といえる。

指導計画の作成に当たっては、家庭科では「家庭生活と家族」の「自分の成長と家族」の内容はガイダンス的内容として5学年の最初に行うことが指定されているが、それ以外の学習内容については学年指定がない。実科においても学習内容の学年指定がなく、この点は両教科同様である。

3. 日本と韓国の児童が捉える家庭科と実科の授業

日本と韓国の小学生が家庭科や実科をどのような教科と捉えているのかについて、授業評価アンケート結果を踏まえて考察する。授業の捉え方としては、児童に焦点をあて、授業を受けた子どもの教科観から評価尺度を作成し、そこから子どもの学習経験を探るものである^{5)~7)}。

先述のとおり、韓国は2009年改訂教育課程から実科は科学/実科になり教科時間配当や学年ごとの学習内容は不明である。しかし1997年改訂教育課程では、5学年、6学年とも年間授業時間数は68時間であり学習内容も学年ごとに示され

表6 第7次教育課程における実科の学習内容

5学年	6学年
(1)私の成長と家族 ・私と家族 ・家庭の仕事と家族員の役割	(1)簡単な食べ物作り ・健康な食事の準備 ・伝統料理や地域の郷土づくり
(2)私の栄養と食事 ・栄養と食品 ・簡単な調理	(2)簡単な生活用品作り ・手縫いで小物の製作 ・生活に役立つ生活用品の製作
(3)服を着ることと管理すること ・自分の生活の服装 ・自分の服の管理	(3)生活資源と消費 ・生活資源の利用と管理 ・生活時間と小づかいの活用
(4)快適な住居環境 ・整理整頓の清掃 ・ゴミの処理と再利用	(4)生活の中の電気・電子 ・電気・電子用品の使用と管理 ・簡単な電子回路づくり
(5)生活の中の木製品 ・生活の中の木材利用 ・木製品の構想と組み立て	(5)動物と共にする生活 ・生活の中の動物 ・愛玩動物や経済動物(家畜)を飼う
(6)植物とともにする生活 ・生活の中の植物 ・花や野菜を育てる	(6)インターネットと情報 ・情報の探索と選択 ・情報を活用した生活
(7)情報機器とサイバー空間 ・情報機器の特性と活用 ・サイバー空間の特性と倫理	(7)仕事と進路 ・仕事と職業の重要性 ・私の将来と進路

ている。

後述する授業評価調査は韓国では2009年に実施しており、その時は1997年改訂の第7次教育課程が実施されていた。第7次教育課程では学年ごとに学習内容が明記されているので、これを紹介するとともに、以後の考察の資料に用いることとする(表6)。また、実科の学習内容は「家庭生活」と「技術の世界」の2つの分野から構成されているが、今回の調査では、実科というだけで、家庭生活分野と限定していないので、子どもたちは実科という教科をイメージして回答していると推察される。

(1) 児童が捉える授業内容構造

ここでは、日本と韓国の児童を対象として実施した授業評価調査^{5)~7)}を基に考察する。

日本と韓国の授業評価調査で抽出された因子は、表7・8に示すとおりである。家庭科は「技能」「課題解決」「学び方」「自信意欲」「まもる」「工夫」、実科は「意欲」「価値」「かかわり」「有能観」「学び方」「まもる」「課題解決」「技能」である。

ここで抽出された家庭科の因子項目と学習指導要録の評価基準との関係を確認する。家庭科の評価基準は「関心・意欲・態度」「創意・工夫」「生活の技能」「知識・理解」の4点である。この学習目標に因子項目を対応させると、「関心・意欲・態度」は「自信意欲」が、「創意・工夫」は「課題解決」「工夫」が、「生活の技能」は「技能」が、「知識・理解」は「学び方」を対応させることができる。以上のことから、児童が捉える家庭科の内容構造は、学習指導要領の目標と概ね合致していることがわかった。

両教科に共通する因子は「技能」「課題解決」「学び方」「まもる」の4因子である。家庭科と実科の因子の中に共通因子がみられる。また、両教科とも「生活の役に立つ」、「生活にいかす」は独立因子として抽出されなかった。このことをどう捉えるかは今後の課題である。

日本と韓国の子どもは自分が受けている家庭科と実科をどのような教科と捉えているかを、因子別得点で明らかにするために、各因子の平均と学年間、男女間について検討を行った。

因子得点(図1・図2)をみると、家庭科の場合因子の平均は1.94~2.50である。因子間の平均点の差は大きく、「技能」と「まもる」因子は2.5前後と高い評価であるが、「課題解決」「学び方」「工夫」は2.2前後と低くなっている。特に「自

信意欲」は低い。日本の児童は家庭科に対して、製作の楽しみや完成の喜びを感じたり、また製作をとおして技能が習得できるといった技能面での評価が高い。さらに授業中にルールを守ったり、自分勝手なことはしないなど「まもる」得点が高いが、これは、家庭科は実習や実験を伴う教科であり、家庭科室へ移動して授業が行われることも多いことから、ルールや約束事が決められているためと思われる。一方、自分からすすんで意見を言ったり、活動に積極的に参加したりするなど授業に対する意欲は低く、実技に対しても自信を持っているとは言い難い。

実科の場合因子の平均は2.02~2.36と因子間の差は家庭科と比較すると小さい。「課題解決」が2.36と高い評価であり、次いで「価値」「まもる」が続く。「学び方」や「かかわり」は低い評価になっている。実科は家族や家庭生活について理解し、生活をよりよくするための課題を解決する教科と捉えているが、一方グループ活動や相互に学び合うなどクラスの中でかかわりをもつような学習面は評価していない。

日韓を比較すると、家庭科と実科を構成している授業内容構造は違いが見られ、両科目間の教科目標は共通する部分もあるが、児童の教科認識には違いが見られた。

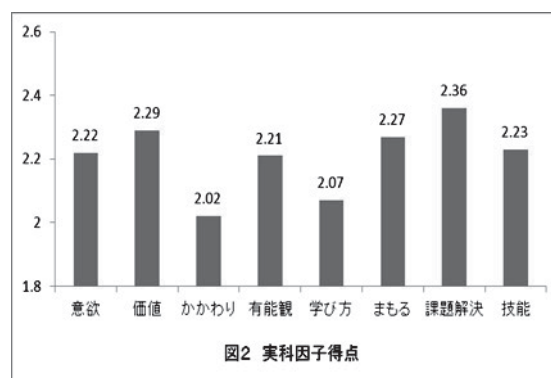
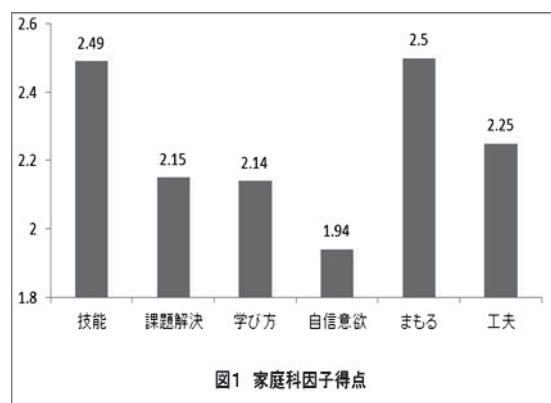


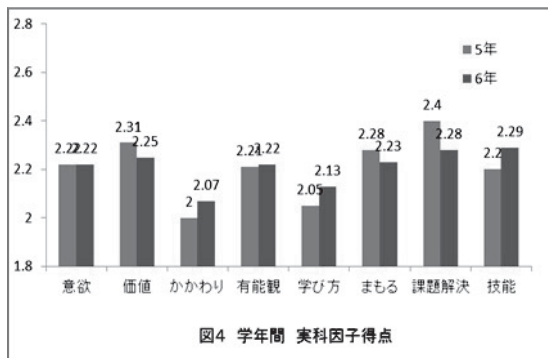
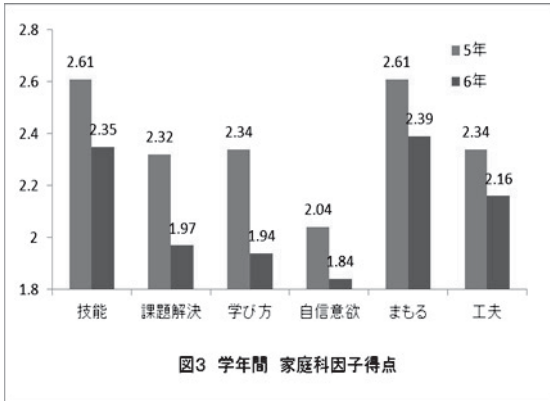
表7 児童の授業評価構造(家庭科)

技能	家庭科の学習ではつくっているうちにじょうずになります	0.681
	家庭科ではものを作る楽しさや喜びが味わえます	0.659
	家庭科は自分の力を伸ばすことができます	0.603
	家庭科の学習は、家庭生活をよくしていこうとする力がつきます	0.586
	家庭科ではいろいろな活動がじょうずにできるようになります	0.576
	家庭科で学習することは生きていくために役立ちます	0.545
	家庭科は「あっ、わかった」「あっ、そうか」と思うことがあります	0.519
	家庭科は友だちとお互いに教えたり、助けたりします	0.516
	学校で、学習したことを家での生活に生かしています	0.502
	家庭科の学習は自分でやるので力がつきます	0.492
	家庭科では友だちと協力して、実習や実験ができるようになります	0.491
	家庭科は家族のことや家庭生活のことがわかります	0.491
	家庭科で一つ実習がうまくできると、新しい実習に挑戦しようという気持ちになれます	0.489
	家庭科で使う用具の準備やあとかたづけはすすんでします	0.440
家庭科は活動する場所や用具を工夫して学習します	0.360	
課題解決	家庭科は自分のめあてをもって学習します	0.650
	家庭科の学習はどのようにしたら自分の課題を解決できるかを学ぶことができます	0.586
	家庭科は自分の課題に向かって何回も取り組みます	0.585
	家庭科の学習ではどんな時も工夫する習慣がみにつきます	0.538
	家庭科ではふかく心に残ることや感動することがあります	0.532
	家庭科をしているとき、どうしたら実習がうまくできるかを考えながら学習します	0.532
	家庭科は授業の決まりや約束事があります	0.468
	家庭科は明るくてあたたかい感じがします	0.449
学び方	家庭科は友だちと仲良くなるチャンスだと思います	0.616
	家庭科が始まる前は、いつもはりきっています	0.568
	家庭科はみんなが楽しく学習できます	0.531
	家庭科はせいっぱい活動することができます	0.504
	家庭科が終わった後も、授業での楽しかったことをともだちと話し合うことがあります	0.444
自信意欲	私は実習がじょうずにできる方だとおもいます	0.724
	家庭科では自分からすすんで活動します	0.598
	家庭科で、グループ活動をするとき、自分から進んで意見をいいます	0.545
	私は少し難しいことでも練習すると、できるようになる自信があります	0.530
	家庭科でならったことを休み時間や放課後にすることがあります	0.502
	家庭科は学習したことに自信をもつことができます	0.456
まもる	家庭科で、ゲームや競争をするときは、ルールをまもります	0.739
	家庭科はいたずらや自分勝手なことはしません	0.716
	家庭科はクラスやグループの約束事があります	0.708
	家庭科はいろいろな実習や実験をおこないます	0.396
工夫	家庭科は作り方がうまくなるための練習をする時間がたくさんあります	0.609
	家庭科は実習がうまくなるための方法を話し合ったり、考えたりする時間があります	0.543
	家庭科は友だちと協力して仲良く学習することができます	0.500
	家庭科は自分の経験を解決する活動をすることができます	0.444
	家庭科は友だちや先生が励ましてくれます	0.420
	家庭科をしているとき、うまい子やじょうずな子グループをみて、うまくできるやり方を考えることがあります	0.361

表8 児童の授業評価構造(実科)

意欲	実科が始まる前は、いつもはりきっています	0.612
	実科は友だちと仲良くなるチャンスだと思います	0.589
	実科はせいっぱい活動することができます	0.526
	実科は友だちとお互いに教えたり、助けたりします	0.516
	実科ではものを作る楽しさや喜びが味わえます	0.513
	実科の学習は自分でやるので力がつきます	0.452
	実科はみんながたのしく学習できます	0.441
	実科が終わった後でも、授業での楽しかったことを友だちと話し合うことがあります	0.397
	実科では作り方がうまくなるための練習をする時間がたくさんあります	0.369
価値	学校で、学習したことを家庭での生活に生かしています	0.662
	実科で学習することは生きていくために役立ちます	0.638
	実科では、家庭生活に必要な知識を学ぶことができます	0.565
	実科では、生活に必要な用品を作ることを学習し、身につけることができます	0.448
	実科で一つ実習がうまくなると、新しい実習に挑戦しようという気持ちになれます	0.381
	実科では、元気で安全な食生活のための能力と態度を身につけることができます	0.374
	実科では、お小遣いについての概念や使い方を学ぶことができます	0.273
かかわり	実科は実習がうまくなるための方法を話し合ったり、考えたりする時間があります	0.594
	実科はクラスやグループの約束事があります	0.541
	実科は友だちや先生が励ましてくれます	0.526
	実科で、グループ活動をするとき、自分から進んで意見をいいます	0.452
	実科ではふかく心に残ることや感動することがあります	0.393
	実科は授業の決まりや約束事があります	0.373
	実科をしているとき、うまい子やじょうずなグループを見て、うまくなるやり方を考えることがあります	0.316
有能観	私は少し難しいことでも練習すると、できるようになる自信があります	0.606
	私は実習がじょうずにできる方だと思います	0.592
	実科は学習したことに自信をもつことができます	0.543
	実科では自分から進んで活動します	0.403
	実科の学習では作っているうちにじょうずになります	0.393
学び方	実科の学習ではどんなときも工夫する習慣が身につきます	0.623
	実科をしているとき、どうしたら実習がうまくなるかを考えながら学習します	0.546
	実科でならったことを休み時間や放課後にすることがあります	0.417
	実科は明るくてあたたかい感じがします	0.376
	実科は自分の課題を解決する活動をすることができます	0.320
まもる	実科はいたずらや自分勝手なことはしません	0.582
	実科は友だちと協力して仲良く学習することができます	0.572
	実科の学習はどのようにしたら自分の課題を解決できるかを学ぶことができます	0.399
	実科で、ゲームや競争をするときは、ルールを守ります	0.386
	実科では先生の話を中心に聞いています	0.358
	実科で使う用具の準備やあとかたづけは進んでします	0.355
	実科は「あっ、わかった」「あっ、そうか」と思うことがあります	0.275
課題解決	実科の学習は、実生活をよくしていこうとする力がつきます	0.562
	実科は色々な実習や実験を行います	0.559
	実科ではいろいろな活動が上手にできるようになります	0.436
	実科は家族のことや家庭生活のことがわかります	0.416
	実科では友だちと協力して、実習や実験ができるようになります	0.370
技能	実科では、生活習慣の種類と環境の関係を学ぶことができます	0.487
	実科は自分の力を伸ばすことができます	0.432
	実科は自分のめあてをもって学習します	0.424
	実科は活動する場所や用具を工夫して学習します	0.429
	実科は自分の課題に向かって何回も取り組みます	0.423

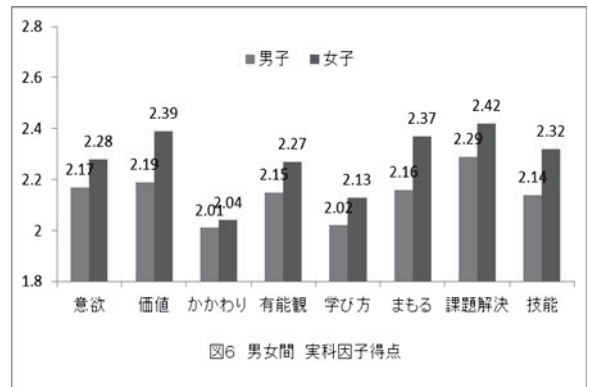
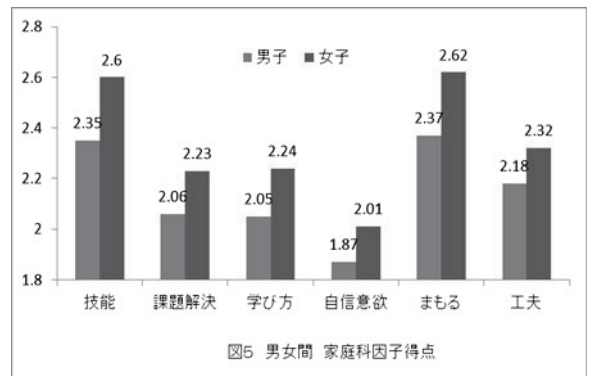
次に、因子得点の学年間の比較をみると（図3・図4）、日本の場合は5年生の方が因子得点が高く、6年生になるといずれの項目も低くなっている。特に、「課題解決」と「学び方」はその差が顕著である。一方、韓国の場合には、「意欲」や「有能観」のように学年間で差がない項目、「価値」「まもる」「課題解決」のように5年生が高い項目、「かかわり」「学び方」「技能」のように6年生が高い項目がみられる。



家庭科・実科は5学年から始まる教科であり、子どもたちは初めて学習する内容に興味や関心があり5年が高く6年で低くなることは予想できるが、韓国の場合6年生で低くなる項目は「価値」と「まもる」と「課題解決」の3項目であり、「技能」や「学び方」、「かかわり」のように6年の方が高得点になっている項目が見られる。この要因の一つには、家庭科と実科の学習内容の違いにあると思われる。すなわち、韓国の実科には、生活技術に関する学習内容や仕事や進路に関する内容が含まれており、6年にはインターネットと情報、愛玩動物や経済動物（家畜）を育てる、仕事と職業選択に関する学習が設定されているために、6年になってからも新しい学習内容があることから、興味や関心が持続していると思われる。しかし家庭科の場合は6学年から始まる新しい分野はない

が、同内容の題材が教えられているわけではなく、学年進行に伴い学習内容は高度化し、多様な学習方法を用いることで子どもたちの興味や関心を引くような工夫はされていると思われる。しかし、そのことが授業を受けている子どもたちからは十分評価されていないようである。6年になって急に評価が下がることの現実を受け止め、子どもの興味や関心が持続するような手立てが必要なのは言うまでもない。

次に、因子得点の男女間の比較をみると（図5・図6）、日本も韓国も男子より女子の方が高得点になっている。日韓とも「技能」「まもる」項目において女子が優位に高いことから、製作を行う過程で調理技能や被服技能の面で男子が苦手意識を持っていることが推測される。



実科の場合、日常生活の中での発明や電気・電子、情報と関連した問題を探索して製品を作ったり、動植物や農作物を育てる経験、および情報を活用する能力を通じて、仕事に対する肯定的価値を持つようにするとともに、職業世界を理解して自分の進路を調べたり、進路設計をする学習内容が含まれている点が家庭科と比較して大きく異なる点である。これらの学習内容はどちらかと言えば男子が好意的に捉える分野と思われるが、本結果からは必ずしもそうとは言えないことがわかった。

家庭科の学年差は課題であり、家庭科と実科の学習内容の違いだけでは説明がつかない。6年次に家庭科学習に意欲や自信を持たせるような学習内容の工夫や学習方法や課題解決の方法について再考する必要があることは日韓の比較から得られた示唆といえる。

(2) 授業を規定する要因 — 教師の要因

ここでは、家庭科と実科を担当している教師のことを児童はどんな先生と認識しているかについて述べる。調査項目は「先生は、熱心に指導してくれます」「先生は、明るくてたのしいです」「先生は、よいアドバイスを与えてくれます」の3項目である。

教師の項目を家庭科と実科で比較してみると（表9）、両国とも「熱心な指導」「よいアドバイス」「明るい先生」の順に高得点になっている。家庭科・実科教師に対する認識は同じで、先生は熱心に指導してくれたり、よいアドバイスをくれたりすると考えている。家庭科の平均点が2.41、実科が2.22であり、家庭科の方が平均値は高くなっている。

表9 教師得点

	家庭科		実科	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
熱心な指導	2.46	0.7	2.3	0.675
明るい先生	2.34	0.74	2.15	0.732
よいアドバイス	2.41	0.75	2.22	0.704

教師要因を学年間で比較すると両国の特徴が明らかになった（図7）。家庭科の場合5年生の方が高得点であり6年生になるといずれの項目も低くなっている。韓国の場合には反対に6年生の方が得点が高くなっている。日本は有意差が認められるが、韓国は有意な差は認められない。

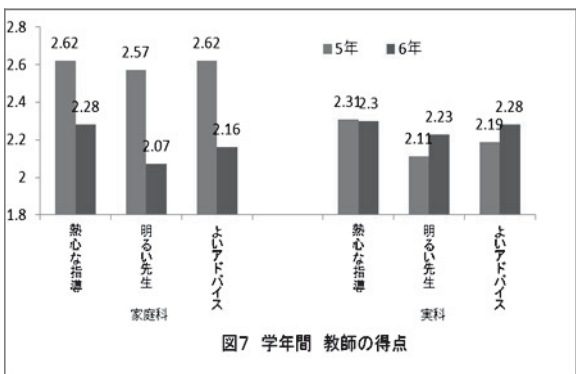


図7 学年間 教師の得点

家庭科を担当する教員に対する評価が学年進行に伴い大きく低下することについては、2 学年同じ担当者が担当する場合とそうでない場合でも状況が全く違ってくる。他の教科と違い、家庭科専科やクラス担任が担当するなど多様な可能性があるため、家庭科という教科独自の課題であると言える。合わせて実科の担当者については担当体制等の実態調査を行い教師に対する評価が学年進行に伴い上がる要因を究明したい。

次に男女間の教師得点を比較すると（図8）、日本も韓国も女子の方が高得点を示している。しかし、男女差では日本の方が大きく有意差が認められるが、韓国は有意な差は認められない。すなわち、韓国の児童は、実科を担当する教師について、学年差も男女差もないことがわかった。

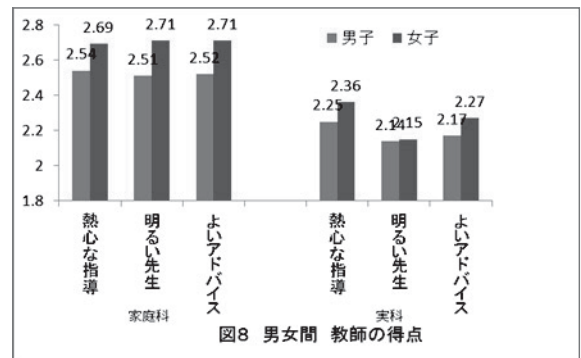


図8 男女間 教師の得点

(3) 授業を規定する要因—授業の好嫌

児童が受けている家庭科や実科の授業について「授業での活動が好き」「他の授業より好き」「よい授業」の3項目について調べた。

表10 授業関係科目

	家庭科		実科	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
授業活動が好き	2.39	0.78	2.4	0.682
他の授業より好き	2.03	0.81	2.06	0.723
よい授業	2.36	0.73	2.25	0.715

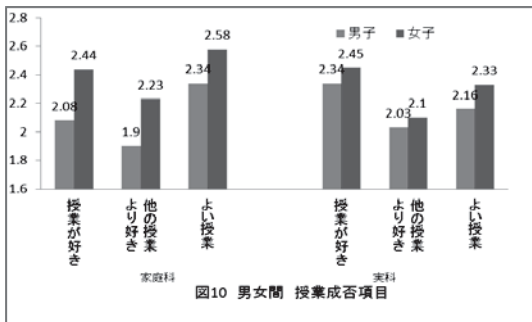
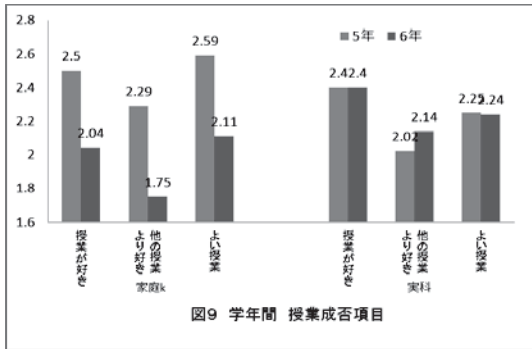
日本と韓国を比較すると、全体では大きな差は認められない（表10）。「授業活動が好き」が最も得点が高く、次いで「よい授業」「他の授業より好き」の順番になっている。家庭科を受けている日本の児童も、実科を受けている韓国の児童も、今までに述べてきた授業内容を規定する要因には差が見られたが、総体的な授業についての認識は同じであることがわかった。

しかし、これらの項目を学年間、男女間で比較すると、日韓で大きな差が認められた。

学年間の比較では、日本の場合5年ではどの項目も高得点を示しているが6年になるとすべての項目が低くなっている。一方韓国の場合、学年差はなく、他の授業より好きは6年の方が高得点になっている。家庭科の場合は学年が上がるに伴い授業が嫌いになるだけでなく、よい授業であるとの評価も低くなっている。

授業評価全体の因子得点や教師要因と同様に授業好嫌度についても日本の場合学年進行に伴い評価が低くなることについては、その原因追究が喫緊の課題と考える。

次に男女間の比較では、男子より女子の方が得点が高い点は日韓で同じであるが、有意差が認められるのは日本のみである。



(4) 授業内容構造の各因子と「良い授業」との関係

授業内容構造因子（家庭科：6因子、実科：8因子）と「よい授業」との関連性を重回帰分析によって行い、各因子の「よい授業」への影響力を検討した。

家庭科では、「課題解決」「技能」「学び方」の各因子の影響が強い。すなわち第一に、めあてを持って学習をしたり、課題を解決するために考えたり、工夫しながら取り組んだりできる家庭科の授業が「よい授業」と認識している。次に、技能が

身についたり、技能を伸ばしたりすることができる、製作の楽しさや喜びを感じるなどの技能概念も児童が捉える「よい授業」に影響を与えている。さらに、授業で友達と仲良くなることができたり、楽しく学習できることも、児童が考える家庭科の「よい授業」に影響を与えている。

表11 家庭科各因子と「よい授業」との関係

	β		γ	
技能	0.228	**	0.618	***
課題解決	0.253	***	0.608	***
学び方	0.195	**	0.602	***
自信意欲	-0.012		0.449	***
まもる	0.079		0.119	***
工夫	0.019		0.517	***
重相関係数 R	0.673	***		
決定係数 R2	0.446			

R2は自由調整済み (p<0.01**,p<0.001***)

一方実科における「よい授業」と各因子の関係は、「技能」「意欲」「有能観」の影響が強い。実科の「よい授業」も家庭科同様に実習や製作で技能が習得できるなど、技能面を重視していることがわかった。家庭科と異なる点では「意欲」「有能観」があげられる。授業に積極的に取り組んだり、友達と相互に教え合いながら活動することで授業に対する意欲がもてることや、授業でできるようになるといった自信を持っていることが実科の「よい授業」に影響を与えていることがわかった。

表12 実科各因子と「よい授業」との関係

	β		γ	
意欲	0.203	**	0.0535	***
価値	0.083		0.47	***
かわり	0.069		0.423	***
有能観	0.148	*	0.492	***
学び方	-0.109		0.387	***
まもる	-0.017		0.356	***
課題解決	0.06		0.464	***
技能	0.253	***	0.554	***
重相関係数 R	0.612	***		
決定係数 R2	0.361			

R2は自由調整済み (p<.05*,p<0.01**,p<0.001***)

4. まとめ

日本と韓国の子どもたちは、家庭科と実科の授業をどんな授業と捉えているかを、日々授業を経験している児童の授業評価調査で得られた知見を基に述べてきた。日本と韓国では教育課程・教育制度は似ているが、教科ごとに見れば学習内容に

は大きな違いがある。今回得られた家庭科と実科の相違は、家庭科と実科の学習内容の違いで説明がつくものもあれば、それだけでは十分説明できないこともある。特に、日本の子どもが授業内容構造評価、教師評価、よい授業評価においてすべて学年進行に伴いその評価が低くなっていることは韓国と比較すると全く違う点であり、この原因追究は家庭科の課題と言える。

今回の比較研究で示唆されることは、「よい授業」との関係で実科の場合「意欲」との関係があることが学ぶべき点であると考え。家庭科も実科も技能概念がよい授業と関係が認められたことは同じであるが、日本の場合「自信意欲」との関係は認められなかった。家庭科の授業で自信や意欲を持たせることが十分できているかを反省しなければならないし、学習をとおして自信や意欲が持てるような授業のあり方を探る必要がある。

授業の捉え方では、子どもと教師と教科目標の3つの視点から見る必要があるが、今回は教師を対象とした調査は実施していない。日本と韓国の教師調査を行うことが今後の課題である。

最後に、今日の日本と韓国では文化交流等は進展しているが、風習や習慣などさまざまな面で違いがあることは言うまでもない。家庭科や実科のように家族や家庭生活を扱う教科では、家族観や生活文化の違いは教科を分析する上でも重要な要因や背景といえるが、今回は生活文化や価値観等に関する内容の調査は実施していない。今後は両国児童の家族観や生活観などを含めた生活実態調査を行い、そのことを背景に家庭科と実科についての比較研究を実施したい。今回解明できなかった両教科間の違いについては別稿に譲ることとする。

引用文献

- 1) 向山玉雄・李戴元 (1989) 韓国における『秘術・家政』の新設の課題 日本産業技術教育学科誌 第31巻 第3号 pp. 173-177
- 2) 日影弥生・金永順 (1991) 韓国と日本の中学校家庭科教育の比較—男女共学の中心に— 弘前大学教育学部紀要 第65号 pp. 85-91
- 3) 鄭暎静・多々納道子・坂田清華 (2010) 韓国大学生の家族生活意識と形成と第7次教育課程における技術・家庭の学習 島根大学生涯学習教育研究センター紀要第7号 pp. 1-14
- 4) 多々納道子・李慶愛・鄭暎静・丸橋静香・正岡さち (2011) 韓国初等実科教育の教科特性と活動中

心の学習戦略の動向 島根大学教育学部紀要(教育科学) 第45巻 pp. 19-26

5) 宮本隆信・上野行一・小島郷子・笹野恵理子・刈谷三郎 (2003) 実技を伴う教科の授業評価による教科横断的研究(1)—高知県児童の因子分析による授業内容構造— 高知大学教育学部研究報告 第63号 pp. 11-28

6) 宮本隆信・上野行一・小島郷子・笹野恵理子・刈谷三郎 (2003) 実技を伴う教科の授業評価による教科横断的研究(2)—高知県児童の基礎統計による各教科の特徴— 高知大学教育学部研究報告 第63号 pp. 29-35

7) 宮本隆信・上野行一・小島郷子・笹野恵理子・刈谷三郎 (2004) 実技を伴う教科の授業評価による教科横断的研究(3)—高知県児童による授業評価試案に基づく各教科特性— 高知大学教育実践研究 第18号 pp. 83-96

8) 刈谷三郎ら (2007) 日韓教科教育入門 音楽・図画工作・家庭・体育 図書出版弘耕

9) 刈谷三郎・宮本隆信・笹野恵理子・慮戴俊・上野行一・小島郷子 (2008) 実技系教科と遊びの日韓比較研究 韓日教育学会 Vol. 13 No. 1 pp. 1-18

10) 宮本隆信・刈谷三郎・Cho Young YOOK・上野行一・小島郷子・笹野恵理子・Sung Bum JU (2011)

한국 초등학교실기계 교과수업의 수업 평가 표작성의 시도-아동에 의한 교과수업 조사의 인자분석- 한국스포츠리서치 제 22 권 2 호 통권 123 호 pp3-10

11) 宮本隆信・刈谷三郎・上野行一・小島郷子・笹野恵理子 (2012) 実技系教科授業における子どもの学びの経験—日本韓国の小学校授業比較を通して— 韓日教育学会 Vol. 17 No. 1 pp. 213-229

参考文献

- ・小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 2008年
- ・2009改正教育課程 教育科学技術部 告示 第2011-361号 [別冊10] 実科・(技術・家庭)教育課程
- ・1997年の教育課程 教育部 告示 第1997-5号 初・中等学校教育課程()